

ケリの群れにとって農地の水辺は必要か

脇坂英弥・脇坂啓子（関西ケリ研究会）

はじめに

1) 農地を主要な生息地にする大型チドリ科の鳥ケリは、農業活動の影響を強く受けていることが知られている。春の耕起により多くの巣と卵が破壊されることは報告されているが、非繁殖期の人為影響は詳しく分かっていない。そこで当会は、京都府南部において、繁殖を終えた夏秋のケリの群れ分布と水辺の利用状況、および農地環境の変化が本種の群れ形成に与える影響を調査した。

2) 当会のこれまでの研究から、GPS および色足環装着された京都府南部のケリが、京都府、大阪府、奈良県、滋賀県、三重県を移動し、かつ様々な環境を利用することが分かっており、農地以外の利用環境を把握する必要性が生じてきた。そこで、兵庫県のケリの確認情報を収集するために“ケリマップ”の作製を行った。また、ケリの利用環境と標識個体の再発見に関心を持ってもらうため、多世代に向けたクイズを行った。

方法

1) 京都府巨椋干拓地（約3,000ha）にて、2024～2025年に色足環標識した148羽とGPS装着した2羽の動きを参考に、2025年7月9日の群れの動きを調査した。

2) 参加者の方々からケリを目撃情報を収集するため、地図にマーキングをしていただくとともに、本課題の内容を含む動画クイズ“ケリ大捜査線”を行った。

結果

1) 調査地において22群（延べ446羽）を確認した。日中に最も利用されたのは湛水田（36%）であった。ついで利用されたのが屋根（32%）で、屋根と水辺とを往来していることが確認された。平均群れサイズが最大となったのは水張休耕田（21羽）であった。約150haの推移調査の結果、中干しで湛水田が減少するとともに水張休耕田の群れサイズが増大し、8月中旬から9月下旬には水張休耕田一か所に集中した（最大群れサイズ33羽/0.1ha、図1）。



図1 水張休耕田に集中分布したケリの群れ

2) 参加者の方々の情報提供により、兵庫県16か所、他府県4か所の目撃情報を得た（図2）。クイズには約30名の方が参加され、本種の生態や当会の研究活動に関心を持っていただいた（判定済み22名、図3）。



図2 参加者の方々によるケリマップ

考察

1) 夏秋のケリの群れは農地の水辺を利用しており、中干し前後の夏秋、水管管理に影響を受ける可能性があることが分かった。中干し後のケリの群れは、水位が適した水張り休耕田を利用するため、水張り休耕田の設置と適切な水位管理を提案する。

2) 兵庫県にもケリが多く生息していることが分かった。参加者の方々のご協力に感謝するとともに、今後の色足環ケリが再発見されることに期待したい。



図3 クイズの判定結果